

「日本史研究討論会参加報告書」

京都大学大学院文学研究科博士後期課程 1 回 勅使河原拓也

以下、項目ごと。

①今回派遣された北京には、以前にも個人的な旅行で訪れたことがあった。2011年のことで、そのときには政治的な日中関係も比較的良好であり、北京のほか、西安などをまわり、当地の文物に触れることができた。なかなかよい印象を持てたため、いま一度行きたいとは思っていた。今回、プログラムの援助を得て再び渡航することができ、大きな収穫があった。前は個人的な旅行ということで史跡めぐりや市井の人々との触れ合いが中心であったが、今回の目的は私の専門とする日本史研究の、中国における最先端をゆく北京大学の学生たちと触れ合い、意見を交換することであり、「外からみた日本史」というものをあらためて実感することができた。私自身は研究分野である鎌倉幕府について、中世国家における位置づけというものを報告したが、これまでほとんど国内の研究者のみによって考えられてきた問題だけに、中国の研究者たちの新鮮かつ率直なコメントは大きな衝撃だった。これまで自分が取り組んできた日本史研究がともすれば閉鎖的な状況に陥りやすいものであったことを反省するとともに、今後は海外の意見を積極的に取り入れていこうと感じた。とはいえ、日本史自体が国外ではまだ本格的に取り組む研究者の少ない分野ではある。今回の経験を活かして、自分が他国とのかけはしになるとともに、日本史研究を広めていく役割を担えることを夢想するものである。

②プログラム名目である日本史研究討論会は2日目(8日)に行われたが、それ以外にも楽しい経験をすることができた。3日間にわたって北京大学の教員や学生の人々と晚餐をともにし、大いに語りあった。討論の場では言えなかったことも、酒が入れば言えることもある。研究のみならず、普段の生活や現在学生の置かれている状況などについても話は及んだ。くわえて中国の白酒(パイチュウ)はおいしい。アルコール度数50度以上という強い酒にすっかり酩酊してしまったが、ざっくばらんに話す場を提供してくれたことはありがたかった。なお、酒宴の後、カラオケにも行った。中国の情熱的な歌謡曲の雰囲気聞き入るとともに、日本のアイドル曲、さらにはアニメソングなどまで入っているのには驚いた。政治的にはすっかり冷え込んでいるとされる日中関係だが、文化面ではこんなところまで交流が進んでいたのだなと妙に感心してしまった。それ以外では、中国国家博物館や故宮などを巡り、4日間は過ぎていった。

③日本史研究討論会(於北京大学、2014年3月8日)

報告内容…「中世武家政権の地域支配」

④現在において海外への進出、ということをも具体的に計画するまでにはいたっていないが、今回の件で広まった視野は、進路選択においても大いに活かされると思っている。